

12.4

第543回 定期演奏会
〈木〉サントリーホール／19時開演

The 543rd Subscription Concert
Thursday, 4th December, 19:00 / Suntory Hall

指揮 シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)

6ページ

Conductor SYLVAIN CAMBRELING (Principal Conductor)

ピアノ アンジェラ・ヒューイット

7ページ

Piano ANGELA HEWITT

オンド・マルトノ シンシア・ミラー

7ページ

Ondes Martenot CYNTHIA MILLAR

コンサートマスター 小森谷巧

Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

酒井健治 ブルーコンチェルト (読響委嘱作品・世界初演) [約17分]

14ページ

KENJI SAKAI / Blue Concerto (YNSO's new commissioned piece, world premiere)

[休憩 Intermission]

メシアン トゥーランガリラ交響曲 [約85分]

16ページ

MESSIAEN / La Turangalila-Symphonie

I. Introduction

II. Chant d'amour I

III. Turangalila I

IV. Chant d'amour II

V. Joie du sang des étoiles

VI. Jardin du sommeil d'amour

VII. Turangalila II

VIII. Développement de l'amour

IX. Turangalila III

X. Final

※当初発表時から出演者が一部変更されました。

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文部科学省文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）
[協力] **アフラック**（アメリカンファミリー生命保険会社）、**AIRFRANCE** エールフランス航空

※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

12.12

読売日本交響楽団 名曲シリーズ 福岡公演
〈金〉福岡シンフォニーホール／19時開演

YNSO Popular Series in Fukuoka
Friday, 12th December, 19:00 / Fukuoka Symphony Hall

指揮 飯守泰次郎

8ページ

Conductor TAIJIRO IIMORI

ピアノ 仲道郁代

9ページ

Piano IKUYO NAKAMICHI

コンサートマスター 小森谷巧

Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ワーグナー 楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉
から第1幕への前奏曲 [約9分]

18ページ

WAGNER / “Die Meistersinger von Nürnberg”, Prelude to Act I

ベートーヴェン ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 作品73〈皇帝〉 [約38分]

19ページ

BEETHOVEN / Piano Concerto No. 5 in E flat major, op. 73 “Emperor”

I. Allegro

II. Adagio un poco mosso

III. Rondo Allegro

[休憩 Intermission]

ベートーヴェン 交響曲 第5番 ハ短調 作品67〈運命〉 [約31分]

20ページ

BEETHOVEN / Symphony No. 5 in C minor, op. 67

I. Allegro con brio

II. Andante con moto

III. Allegro

IV. Allegro

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、FBS福岡放送、読売日本交響楽団
[共催] (公財) アクロス福岡
[後援] 福岡市、福岡市教育委員会
[協力] 北九州・筑豊京築・福岡東部・福岡西部・福岡南部・筑後各読売会

12.18

〈木〉

第12回 読響メトロポリタン・シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール／19時開演

The 12th Yomikyo Metropolitan Series
Thursday, 18th December, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

12.20

〈土〉

第172回 東京芸術劇場マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール／14時開演

The 172nd Tokyo Metropolitan Theatre Matinée Series
Saturday, 20th December, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

12.23

〈火・祝〉

第77回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール／14時開演

The 77th Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series
Tuesday, 23rd December, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

12.19

〈金〉

〈第九〉特別演奏会
サントリーホール／19時開演

Special Concert
Friday, 19th December, 19:00 / Suntory Hall

12.22

〈月〉

第577回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール／19時開演

The 577th Suntory Hall Popular Series
Monday, 22nd December, 19:00 / Suntory Hall

12.26

〈金〉

読売日本交響楽団 大阪定期演奏会
ザ・シンフォニーホール／19時開演

Subscription Concert in Osaka
Friday, 26th December, 19:00 / The Symphony Hall in Osaka

指揮 **レオポルト・ハーガー** 10ページ

Conductor **LEOPOLD HAGER**

ソプラノ **アガ・ミコライ** 11ページ

Soprano **AGA MIKOLAJ**

メゾ・ソプラノ **林美智子** 11ページ

Mezzo-Soprano **MICHIKO HAYASHI**

テノール **村上敏明** 12ページ

Tenor **TOSHIAKI MURAKAMI**

バス **妻屋秀和** 12ページ

Bass **HIDEKAZU TSUMAYA**

合唱 **新国立劇場合唱団** 13ページ

Chorus **NEW NATIONAL THEATRE CHORUS**

合唱指揮 **三澤洋史** 13ページ

Chorusmaster **HIROFUMI MISAWA**

コンサートマスター **ダニエル・ゲーデ**

Concertmaster **DANIEL GAEDE**

ベートーヴェン **交響曲 第9番** ニ短調 作品125 〈合唱付き〉 約65分 21ページ

BEETHOVEN / Symphony No. 9 in D minor, op. 125 "Choral"

I. Allegro ma non troppo un poco maestoso

II. Molto vivace

III. Adagio molto e cantabile

IV. Presto – Allegro assai

※当公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。*No intermission

※当初発表時から出演者が一部変更されました。

〔主催〕読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

〔協賛〕富士通株式会社 (12/18、19)、非破壊検査株式会社 (12/26)、大和ハウス工業株式会社 (12/26)、トヨタ自動車株式会社 (12/26)

〔助成〕文化庁文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）(12/20、22、23)

〔協力〕横浜みなとみらいホール (12/23)

〔事業提携〕東京芸術劇場 (12/18、20)

※12月19日公演では日本テレビ、12月26日公演では読売テレビの収録が行われます。

12.25

第5回 気楽にクラシック ～ヨーロッパ音楽紀行～
〈木〉東京オペラシティ コンサートホール／20時開演 (19時30分から解説)

The 5th "Enjoy classic!" Series Thursday, 25th December, 20:00
(Pre-concert talks from 19:30) / Tokyo Opera City Concert Hall

指揮 **レオポルト・ハーガー** 10ページ

Conductor **LEOPOLD HAGER**

ソプラノ **アガ・ミコライ** 11ページ

Soprano **AGA MIKOLAJ**

メゾ・ソプラノ **林美智子** 11ページ

Mezzo-Soprano **MICHIKO HAYASHI**

テノール **村上敏明** 12ページ

Tenor **TOSHIAKI MURAKAMI**

バス **妻屋秀和** 12ページ

Bass **HIDEKAZU TSUMAYA**

合唱 **新国立劇場合唱団** 13ページ

Chorus **NEW NATIONAL THEATRE CHORUS**

合唱指揮 **三澤洋史** 13ページ

Chorusmaster **HIROFUMI MISAWA**

ナビゲーター **中井美穂**

Navigator **MIHO NAKAI**

コンサートマスター **ダニエル・ゲーデ**

Concertmaster **DANIEL GAEDE**

《ドイツが生んだ世界の宝、第九》

ベートーヴェン **交響曲 第9番** ニ短調 作品125 〈合唱付き〉 約65分 21ページ

BEETHOVEN / Symphony No. 9 in D minor, op. 125 "Choral"

I. Allegro ma non troppo un poco maestoso

II. Molto vivace

III. Adagio molto e cantabile

IV. Presto – Allegro assai

※当公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。*No intermission
※当初発表時から出演者が一部変更されました。

ナビゲーター
中井 美穂 Miho Nakai
アナウンサー。ロサンゼルス生まれ。1987～95年、フジテレビアナウンサーとして活躍。「プロ野球ニュース」「平成教育委員会」などの番組で人気を集める。現在、「タカラヅカカフェブレイク」(TOKYO MXテレビ)、「松任谷正隆のディアパートナー」(FM東京)にレギュラー出演。97年から連続してメインキャスターを務めるTBS「世界陸上」をはじめ、スポーツ・情報・バラエティと幅広い分野のテレビ番組やCMに出演。演劇コラムの執筆や、クラシックコンサートのナビゲーター・朗読も行っている。2013年より、読売演劇大賞選考委員を務める。

〔主催〕読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
〔共催〕公益財団法人東京オペラシティ文化財団
〔協賛〕NTTコミュニケーションズ株式会社
〔後援〕ドイツ連邦共和国大使館、Goethe-Institut Tokyo 東京ドイツ文化センター

4

5

得意の新作初演と十八番のメシアン
常任指揮者カンブルランの真骨頂

シルヴァン・ カンブルラン

(常任指揮者)

Sylvain Cambreling
(Principal Conductor)

◇12月4日 定期演奏会



©読響(撮影:青柳聡)

幅広いレパートリーを縦横に組み合わせた絶妙な選曲と、色彩感あふれる緻密な演奏で圧倒的な評価を確立している読響の第9代常任指揮者(2010年4月就任)。メシアン演奏の第一人者として知られ、読響との06年12月の初共演でも〈トゥーランガリラ交響曲〉を指揮し、圧倒的な成功を収めた。また、新作初演にも積極的に取り組んでおり、欧州を中心に例年20作ほどを世に送り出している。

1948年フランス・アミアン生まれ。これまでにブリュッセルのベルギー王立モネ歌劇場の音楽監督、フランクフルト歌劇場の音楽総監督、バーデンバーデン&フライブルクSWR(南西ドイツ放送)響の首席指揮者を歴任し、現在は世界有数のオペラ・ハウスであるシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督を務めているほか、世界の最先端を行く現代音楽アンサンブルであるクラングフォーラム・ウィーン的首席客演指揮者も兼任している。また、巨匠セルジュ・チェリビダッケの後任として、02年からドイツ・マインツのヨハネス・グーテンベルク大学で指揮科の招^{しょう}聘教授を務めている。

客演指揮者としてはウィーン・フィル、ベルリン・フィルをはじめとする欧米の一流楽団と共演しており、オペラ指揮者としてもザルツブルク音楽祭、メトロポリタン・オペラ、パリ・オペラ座などに数多く出演している。

SWR響とのCD《メシアン管弦楽作品全集》も、世界中で高く評価されている。読響とのCDもこれまでに《幻想交響曲ほか》《ペトルーシュカほか》《第九》が発売されており、最新盤《春の祭典／中国の不思議な役人》《スコットランドほか》の2タイトルが12月上旬にリリースされる。

バッハからメシアンまで弾きこなし
高い人気を誇るピアニスト

アンジェラ・ヒューイット

Piano
Angela Hewitt



©Bernd Eberle

カナダ出身のピアニスト。1985年、トロント国際バッハ・ピアノコンクールに優勝して、一躍世界の注目を浴び、現在はカナダ、ロンドン、イタリア・ウンブリア州を拠点として国際的に活躍している。

「現代最高のバッハ弾き」と称賛を集める一方で、幅広い作曲家をレパートリーとしており、多岐にわたって活躍している。メシアンの〈トゥーランガリラ交響曲〉では、ケント・ナガノの指揮でモントリオール響とともに新コンサート・ホールのこけら落とし公演に出演し好評を博した。また、ハンヌ・リントウ指揮フィンランド放送響との演奏はCD化されている。

読響とは今回が初共演。2015年の欧州公演でも、3月7日のユトレヒト公演と8日のブリュッセル公演で〈トゥーランガリラ交響曲〉のソリストとして出演する。

◇12月4日 定期演奏会

※当初発表時から変更されました。

オンド・マルトノの第一人者
読響との共演のために初来日

シンシア・ミラー

Ondes Martenot
Cynthia Millar



©Lucy Dickens

イギリス出身。ジョン・モートンのもとで電子鍵盤楽器オンド・マルトノを始め、後にメシアンの義妹であるジャンヌ・ロリオのもとでも学んだ。この楽器の第一人者として、これまでに〈トゥーランガリラ交響曲〉を100回以上、サイモン・ラトル、アンドレ・プレヴィン、エサ＝ペッカ・サロネン、ケント・ナガノ、マリス・ヤンソンス、グスターボ・ドゥダメルらの指揮のもとで、世界各地の一流楽団と共演してきた。また、エルマー・バーンスタインやヘンリー・マンシーニらによる映画やテレビドラマの音楽にも数多く参加している。

読響とは今回が初共演。2015年の欧州公演でも、3月7日のユトレヒト公演と8日のブリュッセル公演で〈トゥーランガリラ交響曲〉のソリストとして出演する。

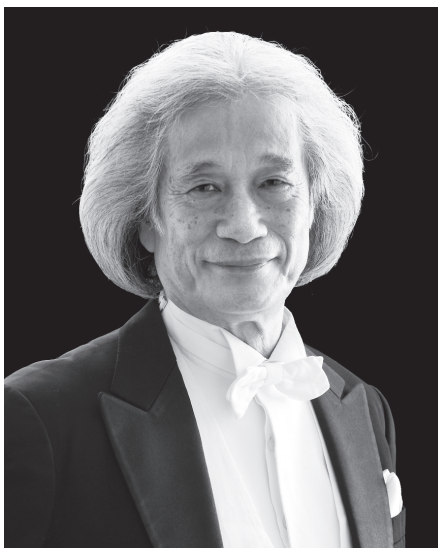
◇12月4日 定期演奏会

※当初発表時から変更されました。

欧州でのキャリアが豊富な巨匠
ドイツ音楽の神髄に迫る

飯守泰次郎

Taijiro limori



©武藤章

◇12月12日 名曲シリーズ 福岡公演

1940年旧満州・新京生まれ。桐朋学園の卒業と同時に藤原歌劇団公演〈修道女アンジェリカ〉を指揮してデビュー。64年から70年まで読響の副指揮者、その後76年まで指揮者を務めた。67年からは並行して海外でも活動し、ブレーメン市立歌劇場指揮者兼コーチとして研鑽^{けんさん}を重ねた後、マンハイム市立歌劇場、ハンブルク州立歌劇場、レーゲンスブルク市立歌劇場、エンスヘデ歌劇団などの指揮者を歴任、オペラ指揮者として確固たる実績を築き上げた。特に72年のバルセロナ歌劇場におけるワーグナーの〈さまよえるオランダ人〉〈ワルキューレ〉で同歌劇場のシーズン最高指揮者賞を受賞。同年、東京での二期会公演〈ワルキューレ〉日本人初演を指揮し、芸術奨励文部大臣新人賞を受賞した。

70年からはバイロイト音楽祭の音楽助手として数々の歴史的公演に加わり、同音楽祭の当時の総監督ヴォルフガング・ワーグナー氏から「飯守泰次郎こそドイツ語でKapellmeisterと呼ぶにふさわしく、そこには“マエストロ”という言葉以上に大きな尊敬の念が込められている」と絶大なる信頼を得た。

90年代以降は国内で名古屋フィル、東京シティ・フィル、関西フィルの常任指揮者を歴任。2000年から4年がかりで取り組んだワーグナー〈ニーベルングの指環〉全4部作上演では、その功績により03年度芸術選奨文部科学大臣賞を受賞、日本におけるワーグナー芸術の重要な担い手としての地位を確固たるものとした。

現在は新国立劇場オペラ部門芸術監督、東京シティ・フィル桂冠名誉指揮者および関西フィル桂冠名誉指揮者の地位にある。これまでにサントリー音楽賞、大阪市民市民表彰、日本芸術院賞を受賞。04年紫綬褒章、10年旭日小綬章をそれぞれ受章。12年度文化功労者。

ベートーヴェン演奏も好評価
多方面で活躍する人気ピアニスト

仲道郁代

Piano
Ikuyo Nakamichi



©Kiyotaka Saito

桐朋学園大学1年在学時に日本音楽コンクールで第1位、併せて増沢賞を受賞。その後も国内外での数々の受賞を経て、1987年にヨーロッパと日本で本格的な演奏活動をスタートさせた。日本の主要オーケストラとの共演のほか、海外の楽団との共演も多い。「ベートーヴェン弾き」としての評価は、パーヴォ・ヤルヴィ指揮ドイツ・カンマーフィルとのピアノ協奏曲全曲演奏や、2回におよぶピアノ・ソナタ全曲演奏などの実績により、不動のものとなった。読響ともこれまでに多数共演している。

映像や語りを交えた幅広い世代向けのコンサート、テレビ・ラジオ、CDなどでも多才な活躍ぶりを見せ、演奏はもとより企画力や豊かな人間性でも多くのファンを魅了し続けている。レコーディングはソニー・ミュージックジャパンインターナショナルと専属契約を結び、多数のCDをリリースしている。《ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第30、31、32番》は、2007年度第45回レコード・アカデミー賞（器楽曲部門）を受賞。

◇12月12日 名曲シリーズ 福岡公演

ウィーン音楽界の重鎮
読響〈第九〉に初登場

レオポルト・ ハーガー

Leopold Hager

◇12月18-26日〈第九〉公演



©Dimo Dimov

1935年オーストリア、ザルツブルク生まれ。生地のモーツアルテウム音楽院で指揮、オルガン、ピアノ、チェンバロ、作曲を学ぶ。マインツ、リンツ、ケルンなどで指揮者を務めたのち、フライブルク市の音楽総監督、モーツアルテウム管の首席指揮者を歴任。その後は96年までルクセンブルク放送響（現在のルクセンブルク・フィル）の音楽監督も務めた。また、92年から2004年までウィーン国立音楽大学で合唱と管弦楽指揮の指導にあたり、門下から下野竜也をはじめとする数々の指揮者を輩出した。名伯楽としても知られている。

05年から08年までウィーン・フォルクスオーパーの首席指揮者を務め、08年には来日公演も果たした。また、ウィーン国立歌劇場と長年にわたって共演を重ねてきたほか、バイエルン国立歌劇場、ドレスデン・ゼンパーオーパー、メトロポリタン歌劇場、コヴェント・ガーデンといった世界の一流歌劇場で活動している。著名なオーケストラとの共演も数多く、シュターツカペレ・ドレスデン、バンベルク響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、ハンブルク北ドイツ放送響、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、パリ管などと共演。近年はイギリス室内管と録音を重ねている。もちろんウィーン・フィルとの共演も多く、ウィーンのみならずプラハやローマでの公演を指揮している。

かつてほとんど知られていなかったモーツアルトの〈ルーチョ・シッラ〉〈アポロとヒュアキントゥス〉〈アルバのアスカニオ〉〈救われしベトゥーリア〉〈シピオーネの夢〉など、初期の劇場作品をザルツブルクで上演し、よみがえらせたことでも高く評価されている。

読響とは今回が初共演。

世界中で聴衆を魅了するソプラノ
〈第九〉で読響と待望の初共演

アガ・ミコライ

Soprano
Aga Mikolaj



©Wernicke

ポーランド出身。ポズナニ音楽アカデミーとウィーン国立音楽大学で声楽を学び、レナータ・スコットやエリザベート・シュヴァルツコップらのマスタークラスも受講。1995年アダ・サリ声楽コンクールで特別賞を、96年スヘルターヘンボス国際声楽コンクールで聴衆賞とG. F. ヘンデル賞を、99年アルフレード・クラウス国際声楽コンクールでヴェルディ賞を受賞。

ポズナニ大劇場で95年にデビュー後、バイエルン国立歌劇場、パリ・オペラ座、ベルリン・ドイツ・オペラ、ウィーン国立歌劇場などで〈フィガロの結婚〉伯爵夫人、〈魔笛〉パミーナ、〈カルメン〉ミカエラ、〈ラ・ボエーム〉ムゼッタなどを歌って高い評価を得ている。日本では、本年10月に〈ドン・ジョヴァンニ〉ドンナ・エルヴィーラで新国立劇場に出演したことが記憶に新しい。

◇12月18-26日〈第九〉公演

多彩な役でオペラを彩る
人気絶頂のメゾ・ソプラノ

林 美智子

Mezzo-Soprano
Michiko Hayashi



東京音楽大学卒業。桐朋学園大学研究科、二期会オペラスタジオ、新国立劇場オペラ研修所第1期修了。文化庁派遣芸術家在外研修員としてミュンヘンに留学。2003年国際ミトロプーロス声楽コンクール最高位入賞。第5回ホテルオークラ音楽賞受賞。

二期会、新国立劇場を中心に多彩な役柄を演じ好評を博す。2009年の佐渡裕プロデュースオペラ〈カルメン〉ではタイトル・ロールで新たなカルメン像を創り絶賛された。これまでにチョン・ミョンフン、パーヴォ・ヤルヴィなど国内外の指揮者や主要オーケストラと共演を重ねる。オペラ界のトップアーティストが揃う《NHK ニューイヤーオペラコンサート》には2005年から連続出演。人気、実力ともに群を抜くメゾ・ソプラノとして活躍する。CDは、《赤と黒》《地球はマルイゼ〜武満徹：SONGS》（ビクター）、《ベル・エクサントリック〜林美智子ベル・エポック歌曲集》をリリース。

◇12月18-26日〈第九〉公演

劇場の注目を一手に集める
藤原歌劇団のプリモ・テノール

村上敏明

Tenor
Toshiaki Murakami



国立音楽大学卒業。文化庁国内研修員を経て、2001年から2年間文化庁在外研修員としてボローニャへ留学、その後07年までイタリアを拠点に活動。マダムバタフライ世界コンクールでのグランプリ獲得をはじめ、数多くの声楽コンクールに上位入賞。04年には日伊声楽コンクールとイタリア声楽コンクールの国内二大タイトルを制覇し、大きな注目を浴びた。

国内では藤原歌劇団や新国立劇場を中心に活躍し、〈椿姫〉アルフレード、〈蝶々夫人〉ピンカートン、〈ラ・ボエーム〉ロドルフォ、〈トスカ〉カヴァラドッシなどイタリア・オペラの主役の多くを当たり役としているほか、〈黒船〉執事、〈修禅寺物語〉頼家、〈午後の曳航〉黒田登なども好演し、高い評価を得ている。

五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。東京藝術大学非常勤講師。藤原歌劇団団員。

◇12月18-26日〈第九〉公演

日本人離れした堂々たる風格
国内外で引く手数多の^{あまた}本格派バス

妻屋秀和

Bass
Hidekazu Tsumaya



東京藝術大学、同大学院修了。92年よりミラノに留学。94年から2001年までライプツィヒのライプツィヒ歌劇場、02年から11年までワイマールのドイツ国民劇場専属。今までに出演した主要な歌劇場はブレゲンツ湖上音楽祭、ベルリン・ドイツ・オペラ、ベルリン州立歌劇場、ライン・ドイツ・オペラ、新国立劇場等。欧州、日本でモーツァルト、ロッシーニ、ヴェルディ、プッチーニ、ワーグナー、R. シュトラウス等のオペラの主要な役を多くの著名な指揮者、演出家、歌手と共演。これまでに出演したオペラは60余作、演じた役は80役、公演数は800を超える。恵まれた^{たたく}体躯と深みのある柔らかな歌声と重厚な演技で舞台上において圧倒的な存在感を醸し出している。オペラのみならずオーケストラ・コンサート、宗教曲のソリストとして、また経験に基づいたマスター・クラスなど教育活動にも取り組んでいる。第24回ジローオペラ賞受賞、第3回ロシア歌曲賞受賞。ライプツィヒ在住。二期会会員。

◇12月18-26日〈第九〉公演

※当初発表時から変更されました。

読響〈第九〉のベスト・パートナー
至高のハーモニーで人類愛を歌う

新国立劇場合唱団

New National Theatre Chorus

オペラ、バレエ、コンテンポラリーダンス、演劇という現代舞台芸術のためのわが国唯一の国立劇場として1997年10月に開場した新国立劇場で、オペラ公演の核を担う合唱団として活動を開始した。100名を超えるメンバーは高水準の歌唱力と優れた演技力を有しており、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量は、公演ごとに共演する出演者、指揮者、演出家、スタッフはもとより、国内外のメディアからも高い評価を得ている。読響とは2007年以降、年末の〈第九〉公演をはじめ数多く共演してきた。特にベルリオーズ〈ロミオとジュリエット〉(11年9月)、ラヴェル〈ダフニスとクロエ〉(12年10月)、ベートーヴェン〈第九〉(12年12月)、ストラヴィンスキー〈詩篇交響曲〉(13年9月)では常任指揮者カンブルランのもとで見事な歌唱を披露し、観客を魅了した。

◇12月18-26日〈第九〉公演

合唱団から最高のハーモニーを引き出す
卓越した手腕を持つコーラスマスター

三澤洋史

Chorusmaster
Hirofumi Misawa



国立音楽大学声楽科卒業後、指揮に転向。ベルリン芸術大学指揮科を首席で卒業。1999～2003年、祝祭合唱団指導スタッフとしてバイロイト音楽祭に参加。01年に新国立劇場合唱団指揮者に就任し、以後同劇場で行われるほぼすべての公演で合唱指揮者を務めている。また、バツハに深く傾倒しており、06年に東京バロック・スコラーズを結成。12年7月の〈マタイ受難曲〉演奏会は『音楽の友』誌の批評などで好評を得た。11年には文化庁在外研修員としてイタリア・ミラノに3か月間滞在。スカラ座合唱団の音楽作りを学び、イタリア・オペラへの造詣をいっそう深めた。声楽を伴う数多くの管弦楽作品に精通し、オペラ、オラトリオの指揮者として幅広く活動している。日本顕彰会より社会貢献者賞受賞。上毛新聞社より上毛音楽賞受賞。日本ワーグナー協会会員。

◇12月18-26日〈第九〉公演

酒井健治 ブルーコンチェルト

作曲:2014年/初演:2014年12月4日、サントリーホール/演奏時間:約17分

〈ブルーコンチェルト〉は読売日本交響楽団のために、今年の5月から10月にかけて書きました。この作品の委嘱の際に、既に今夜の初演以降の再演のことも聞いており、来年3月に行われる読響のヨーロッパツアーにおいて欧州初演されることを念頭に置いて作曲しています。つまり読響の個性、アンサンブル能力のみならず、個々の演奏能力が十二分に発揮されるように書いた作品なのです。この作品の出発点はオーケストラのための協奏曲というアイデアからであり、大管弦楽の中からまずはヴァイオリンのソロが浮かび上がり、オーケストラ内の弦楽四重奏、更には管楽器群からそれぞれ一管ずつ合わされ室内オーケストラに発展する等、さまざまな室内楽やアンサンブルの響きが生成されます。

そして、ヨーロッパで今回の《定期演奏会》と同じプログラム、つまりメシアンの〈トゥーランガリラ交響曲〉とともに演奏

されるとのことで、メシアンへのオマージュとして僕の作品を書こうと決めました。メシアンの作品群で見られるモードやオーケストレーションの使用がその証であり、更には〈トゥーランガリラ交響曲〉に現れるモチーフを僕のやり方で更新を試みる等、僕の最初期に最も影響を受けた作曲家をこの作品でもって讃えたつもりです。そして今回は色彩をテーマに、僕が個人的に最も好きな色である青のイメージが喚起するもの、自然界の気や水滴、波が主に急速な音階進行で表され、それはあたかもエッシャーの絵画の様な、印象的な電子音響効果であるシェパードトーン（無限音階）を管弦楽にオーケストレーションするに至るまで発展します。

僕が今まで培った技法も余すことなく用い、僕の過去の作品、〈ホワイトアウト〉（2012～13）や〈ブラックアウト〉（2013～14）といった色を伴うタイトルを持つ他の作品群のカラーージュがこの作

品において試されます。特に〈ダンスマカーブル〉（2012）の中から、真夜中を告げる鐘がこの作品の終結部で12回鳴ります。僕の祖母が今年の夏に亡くなったのですが、僕が海外に在住しており臨終に立ち会えなかったため、遅ればせながらこの12回の鐘によって追惜し、同時に個人的にお会いしたことはなかったのですが、今年亡くなったある偉大なオペラ劇場監督に対して、音楽界の大きな損失への僕なりの弔いとさせていただきます。その終結部に至るために冒頭の弦楽器による完全五度が導かれ、その響きはちょうどこの時期、年末に日本でよく聴かれるベートーヴェンの〈第九〉の冒頭を彷彿とさせます。それはこの作品において、特にカラーージュと呼べるような大層なものではありませんが、重要な

モチーフの一つとして厳密に発展、構築されているのです。

以上のように、単純に作曲されたパッセージの組み合わせに留まらない、さまざまなコンテクスト（脈絡）やコノテーション（含蓄）が一つの作品に奇跡的に集約されたのです。シルヴァン・カンブルラン氏と読売日本交響楽団に献呈した今回の作品は、規模から言ってこれまでの僕の音楽の集大成であると言っても過言ではないと思います。僕は常にドラマトウルギーを考えながら形式やモチーフ等を構築しますが、今回はその最たるものと言えます。青を基調とした様々な色彩のグラデーション、アンサンブル同士による協奏が音楽の熱を孕ませ、それが大管弦楽に波及していくさまを是非感じ取っていただきたいと思います。

楽器編成/フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（エスクラリネット・バスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、ハイハット、小太鼓、ログドラム、木鉦、ウッドブロック、ポリブロック、グロッケンシュピール、ヴィブラフォン、チューブラーベル、クロタル、鉄板、鍵盤ハーモニカ、ウォーターフォン、トライアングル、フレクサトーン、スプリングコイル、ボウル、金床、ホース、サンドペーパー、ラチェット、タムタム）、チェレスタ、弦五部

酒井健治 Kenji Sakai Composer



©Philippe Stirnweiss

1977年大阪生まれ。京都市立芸術大学を卒業後渡仏。フランス国立パリ高等音楽院、ジュネーヴ音楽院を最優秀の成績で卒業、IRCAM（フランス国立音響音楽研究所）にて研究員として電子音楽を専門的に学ぶ。オーケストラ、アンサンブル、室内楽等の器楽曲や電子音響を含む楽曲は、ベルギー国立管弦楽団、ルツェルン交響楽団、アンサンブル・アンテルコンタンポラン、リヨン国立管弦楽団、N響、東京フィル、新日本フィル等、国内外の演奏団体により演奏され、ヨーロッパおよび日本国内の音楽祭、定期演奏会などで取り上げられている。また、ジョルジュ・エネスク国際コンクール作曲部門グランプリ（2007）、武満徹作曲賞（2009）、エリザベート王妃国際音楽コンクール作曲部門グランプリ（2012）、文化庁長官表彰（2012）、第23回芥川作曲賞（2013）等を次々に受賞。2012年フランスアカデミーの会員に選出され、マドリッドに1年間滞在。現在、ベルリン在住。

メシアン トゥーランガリラ交響曲

作曲：1946～48年／初演：1949年12月2日、ボストン・シンフォニーホール（L.パーンスタイン指揮）／演奏時間：約85分

トゥーランガリラとは、言葉を越えた体験からもれ出た叫びである

生まれながらの信仰者を自任していたオリヴィエ・メシアン（1908～92）は、カトリック神秘主義にもとづく演奏会用の宗教作品を数多く残した。しかし、メシアンの作曲家人生には、宗教作品から離れ、もっぱら人間の愛を歌った時期がある。伝記作者たちが「トリスタンの時代」と呼ぶこの時期を、メシアンはずっと後になって次のように振り返っている。「わたしはこれをイヴォンヌ・ロリオに負っています。たとえ話が必要であれば、こう言いましょう。鳥たちが本当に歌を歌うのは春だけだ、そして、春とは愛の季節である。鳥たちは、このとき才能に恵まれる」。〈トゥーランガリラ交響曲〉は、このトリスタンの時代を代表する作品であった。

〈トゥーランガリラ交響曲〉に取り組んでいた1940年代後半は、たしかにメシアンの絶頂期のひとつであった。メシアンはこのとき「いまから見ても極度に複雑な作品を、驚くほどやすやすと書くことができた」という。社会的にも充実しており、彼の暮らすパリにはドイツ軍の占領の爪痕が残っていたとはいえ、いまやメシアンの作品が多く再演されるようになっていたし、彼の新作発表はいつ

もニュースになった。〈トゥーランガリラ交響曲〉は、アメリカのクーセヴィツキー財団からの委嘱作であるが、このように海外から大規模作品の依頼が舞い込むこと自体、当時のメシアンの名声の高さを示している。

しかし、名声はスキャンダルの温床ともなる。何よりも大切にしていた宗教作品が、突然に非難の大合唱にさらされたのもこの時期であった。メシアンの響きは官能的で、彼の語る神学的アイデアは音楽とは何の関係もない、というのだ。加えて、私生活においても悄然とする出来事がつづいた。息子のパスカルを残し、妻のクレールが手術の後遺症で次第に記憶を失っていく。そして、戦争捕虜を解かれてパリに戻って以来の生徒、イヴォンヌ・ロリオとの不倫のうわさ。

メシアンがトリスタンの主題に没頭したのは、このような状況のなかである。ここでいうトリスタンとは、ワーグナーの〈トリスタンとイゾルデ〉に謳われる愛のことであり、ドビュッシーの〈ペレアスとメリザンド〉にささやかれる愛のことである。それを不倫愛といってしまうとそれまでだが、ジャンケレヴィッチの言葉をかりて、トリスタンをい

ま、人間の愛の不可能性、「法は愛に否定され、愛は法に否定される」悲劇のことだといっておこう。

しかし、トリスタンの主題にもとづく〈トゥーランガリラ交響曲〉にストーリーを期待しても無駄である。メシアンはいう。自分はただ「宿命的な愛、抗えない愛、原則として死にいたる愛、肉体を超え、精神の与件さえ超えて、宇宙的な規模に広がっていくがゆえに死をよばざるをえないような愛」の観念だけを保持した、と。しかし、それすらまだ説明的だ。メシアンは、ただ「トゥーランガリラ」と叫んだのだ。

あるひとはこれを女性の名前だといい、あるひとはこれをヒンドゥーのリズムだといい、あるひとはトゥランガが時で、リーラーが愛だという。メシアン自身がこうした説明に加担したことも事実だが、それらは後づけにすぎない。「わたしは、ただその響きゆえにこの言葉を選んだ」。トゥーランガリラ、これは言葉以前の言葉、言葉にできない体験がもれ出させる叫びであった。

では、これが交響曲だというのは？
メシアンによれば、この作品は、交響曲に標準的な4楽章構成からスタートした。つまり、第1楽章“イントロダクシ

ョン”、第4楽章“愛の歌2”、第6楽章“愛のまどろみの園”、第10楽章“フィナーレ”がまずあって、これらが急・緩・舞・急の4楽章を作っていたという。そこに交響曲の面影がある。しかし、このプランは無限に拡大され、ついには全10楽章のトゥーランガリラになった。ここでは、三つの「愛の歌」の系列（第2、第4、第8楽章）と三つの「トゥーランガリラ」の系列（第3、第7、第9楽章）が互いにバランスを取りながら、背骨となる四つの楽章（第1、第5、第6、第10楽章）を破壊しつつ装飾している。そして、この法外な構成が、ピアノ奏者とオンド・マルトノ奏者をソリストに迎え、ふんだんに打楽器を含んだ3管編成の管弦楽で彩色されていく。さらに、この法外な編成が、無限に変化するリズム、和音、主題の複雑な組み合わせを色分けしていく。

これらすべてを聴き取ることは人間の耳には不可能であるし、メシアンにしても聴き手にそれを求めたわけではない。彼は、高度に組織された極彩色の音響の渦のなかで、ただ私たちが魅惑されることを望んでいるのである。それはまさしく言葉を越えた体験となるはずで、そのときにこそひとは「トゥーランガリラ」と叫ぶだろう。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、ピッコロトランペット、ホルネット、トロンボーン3、チューバ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、チャイナ・シンバル、ターキッシュ・シンバル、タムタム、小太鼓、プロヴァンス太鼓、タンブリン、テンブルブロック、ウッドブロック、マラカス、ヴィブラフォン、チャイム、鐘）、チェレスタ、ジュ・ドゥ・タンブル、弦五部、独奏ピアノ、独奏オンド・マルトノ

ワーグナー

楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉から第1幕への前奏曲

作曲：1862年／初演：1862年11月1日、ライプツィヒ／演奏時間：約9分

ワーグナーの醍醐味が集約された、豪壮で華麗な祭典的音楽

楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉は、ドイツ・ロマン派オペラの巨人リヒャルト・ワーグナー（1813～83）が、〈トリスタンとイゾルデ〉に続いて生み出した、円熟期の大作。全体は、1862～67年に作曲され、1868年ミュンヘンで初演されたが、この前奏曲は、作曲後間もなく先行初演されている。

「マイスタージンガー」とは、中世ドイツにおける、「歌手＝ジンガー」の能力を兼ね備えた「職人の親方＝マイスター」を意味している（親方への昇格には、技術以外に歌の自作および歌唱能力が求められた）。本編は、実在した靴屋の親方ザックスが、金細工師の親方の娘エヴァに恋する騎士ヴァルターを助け、歌合戦に勝たせてエヴァを獲得させる……と

いった物語。ワーグナーの本格作中、劇的要素をもった唯一の作品である。

第1幕への前奏曲は、劇中の動機を多数用いて構成された、壮麗でドラマティックな音楽。全合奏による「マイスタージンガーの動機」で堂々と始まり、柔らかな「愛の情景の動機」を経て、明るい「行進の動機」が奏される。さらに複数の動機が現れた後、ヴァイオリンの「愛の動機」に始まる優美な部分となり、やがて「マイスタージンガーの動機」が再登場。複数の動機が交錯しながら高揚し、「行進の動機」を中心とした華やかな終盤を迎える。対位法的な動きや重層感が際立っており、半ば過ぎで三つの動機が同時進行する場面は、特に聴きどころとなる。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、トライアングル）、ハープ、弦五部

ベートーヴェン

ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 作品73 〈皇帝〉

作曲：1809年／初演：1811年11月28日、ライプツィヒ／演奏時間：約38分

「皇帝」の名に相応しい、壮麗でシンフォニックな力作

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が完成させた最後の協奏曲であり、耳の病を乗り越えて幾多の名作を生み出した、中期“傑作の森”の代表作のひとつ。〈運命〉〈田園〉両交響曲初演の翌1809年に作曲され、1811年ライプツィヒで初演された。

同曲には二つの背景がある。一つは1809年のフランス軍のウィーン侵攻による戦渦とナポレオンへの怒り、もう一つは地主令嬢テレーゼ・マルファッティへの恋愛感情で、前者は軍隊風の曲調、後者は変ホ長調の明るい調性に反映されたといわれている。また〈皇帝〉のタイトルは、ベートーヴェン自身の命名ではなく、壮麗で堂々たる内容から「ピアノ協奏曲の皇帝」の意味で、後に名付けられた（クラマーという出版者の命名とされる）愛称だが、曲にまさしくフィットしている。

曲は、古典的な2管編成とは思えないほどシンフォニックな響きをもった作品。ピアノと管弦楽が交響曲的な融合と絶妙な対話を果たしていく、エネルギーに満ちた音楽だ。第1楽章冒頭から華麗なピアノ・ソロが登場する点が特徴的で、これが曲の印象を決定付ける。長い名人芸的カデンツァは不要とばかりに、自ら短いカデンツァを記した点も特筆され、そこには首尾一貫した音楽にしようというベートーヴェンの意志がうかがえる。さらには、第2～3楽章を切れ目なく続け、第2楽章の最後で次楽章の主題を暗示的に登場させる点も当時としては目新しい。

第1楽章 アレグロ ピアノが広々としたソロを奏でる開始（しかしこの後95小節もピアノが登場しない）の後、行進曲調の第1主題と歯切れの良い第2主題を軸に、華やかな楽想が展開される。全曲の約半分を占める長大な楽章。

第2楽章 アダージョ・ウン・ポーコ・モッソ 穏やかな旋律が変奏をまじえながら流れていく、柔和で幻想的な緩徐楽章。切れ目なく第3楽章へ。

第3楽章 ロンド、アレグロ 冒頭の勢いある主題を軸にした勇壮なフィナーレ。ロンド本来の軽快さとは一線を画した力強さが支配し、ピアノの名人芸も発揮される。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ベートーヴェン 交響曲 第5番 ハ短調 作品67 〈運命〉

作曲:1807~08年/初演:1808年12月22日、ウィーン/演奏時間:約31分

クラシック音楽の象徴となった、“暗”から“明”への劇的交響曲

インパクトのある出だしで有名なこの曲も、ベートーヴェンの中期“傑作の森”の所産。対照的な曲調の第6番〈田園〉と並行して作曲され、1808年ウィーンで同時に初演された。

ただ、着想自体は完成の約4年前にさかのぼり、かの「ジャジャジャ・ジャー」の4音＝「運命動機」を緊密に練り上げるまでには、かなりの推敲が重ねられた。また〈運命〉のタイトルは、『運命はこのようなして扉を叩く』とベートーヴェンが語った」という弟子シンドラが伝える逸話に由来しているが、彼の話は捏造が多く、これも信憑性が疑われている。そのためか、同タイトルは日本以外ではほとんど用いられていない。

9曲それぞれに新機軸を打ち出したベートーヴェンの交響曲の中でも、5番はとりわけ独創性に溢れている。一つ目はもちろん運命動機の活用。この動機を隙なく積み重ねて構築された第1楽章がまづ斬新だ。さらに運命動機は、後続楽章にも登場して、曲全体に統一感をもたらす。二つ目は、ハ短調からハ長調に至る「暗から明へ」「闘争から勝利へ」の明確

な構図。これはベートーヴェンのトレードマークにもなった。三つ目は、第3楽章の最後の音を盛り上げたまま第4楽章に移る手法。これも実にユニークだ。四つ目は、交響曲史上初となるピッコロ、コントラファゴット、トロンボーンの使用。各楽器は第4楽章にのみ登場してサウンドの幅を拡大させ、勝利の凱歌に貢献する。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 運命動機の連続で緻密に構築される緊迫した楽章。弦で柔和に出される第2主題の背後でも運命動機が鳴っている。それだけに一瞬のオーボエ・ソロが印象的。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート 二つの主題を用いた美しくも雄大な変奏曲。安らぎと緊張感が同居している。

第3楽章 アレグロ ホルンで出される運命動機を中心とした主部と、荒々しい中間部からなるスケルツォ楽章。不気味な経過部分が高潮して第4楽章へ入る。

第4楽章 アレグロ 全合奏に始まる輝かしい凱歌。途中で第3楽章の運命動機が回想された後、果てしなく高揚していく。

楽器編成/フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

プログラムノーツ

PROGRAM NOTES

飯尾洋一
いいお よういち・音楽ライター

第12回
読響メトロポリタン・シリーズ

12.18 〈木〉

〈第九〉特別演奏会

12.19 〈金〉

第172回
東京芸術劇場マチネ・シリーズ

12.20 〈土〉

第577回
サントリーホール名曲シリーズ

12.22 〈月〉

第77回
みなとみらいホリデー名曲シリーズ

12.23 〈火・祝〉

第5回
気楽にクラシック

12.25 〈木〉

読売日本交響楽団
大阪定期演奏会

12.26 〈金〉

ベートーヴェン 交響曲 第9番 ニ短調 作品125 〈合唱付き〉

作曲:1818年頃~24年/初演:1824年5月7日、ウィーン、ケルントナートーア劇場/演奏時間:約65分

シラーの「歓喜に寄す」を高らかに歌う、異例の声楽入り大交響曲

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770~1827）の最後の交響曲となった〈第九〉が初演されたのは、1824年のこと。交響曲第8番が1814年に初演されてから、実に10年ぶりの新作交響曲となった。

この間、ベートーヴェンは甥カールの後見人問題に心を砕いていた。1815年末に弟のカスパル・カールが病死したことで、彼の生活環境は劇的な変化を迎える。弟の遺書には9歳の息子カールの共同後見人としてベートーヴェンと、母親

ヨハンナが指名されていた。ベートーヴェンは甥カールに対して父親としての責任を負うことを望む一方、義妹ヨハンナに対してはカールの養育者として不適当であると訴え、以後4年半にもわたって甥をめぐる激しい争いが法廷で続いた。ベートーヴェンは甥の世話に奔走する。かつて創作活動と妻を持つことは両立しなかったと考えた独身者ベートーヴェンが、創作活動と子育ての両立を求められることになったのだ。この時期、大規模な作品の作曲はめっきりと減り、小品や機会

音楽の作曲が目立つようになる。

しかし1817年秋頃より、ベートーヴェンは旺盛な創作力を取りもどす。ロンドンのフィルハーモニー協会から2曲の新作交響曲を依頼され、これを引き受けることを決心した。交響曲はすぐには完成されず、ピアノ・ソナタ第29番〈ハンマークラヴィアー〉や〈ミサ・ソレムニス〉などの傑作を書いた後、1822年になってベートーヴェンは集中的に新作交響曲の筆を進める。当初構想されていた2曲の交響曲は、一つは二短調の交響曲、もう一つは声楽を導入した「古い旋法による交響曲で、敬虔な歌^{けいけん}」であったが、両者は「フィナーレにシラーの『歓喜に寄す』を持つ二短調交響曲」として一つに集約された。

1824年に作品が完成すると、ウィーンの人々から、ベートーヴェンの新作交響曲をこの街でも聴きたいという嘆願書が作曲家のもとに届けられた。ベートーヴェンは要望にこたえ、ケルントナートーア劇場での初演を承諾する。客席は満員になり、ベートーヴェンは熱烈的な歓迎を受けた。初演に際し、舞台上のベートーヴェンはすでに聴力を失っていたため客席からの万雷の拍手に気づかず、独唱者から客席を向くように促されて、はじめて聴衆の喝采に気づいて腰をかがめた

という逸話が残っている。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロツポ、ウン・ポコ・マエストソ 神秘的なトレモロから主題の断片が顔をのぞかせ、その頂点で全貌をあらわすという劇的な開始部を持つ。あたかも混沌から秩序が生まれるかのよう。

第2楽章 モルト・ヴィヴァーチェ デモニッシュ（悪魔的）な大規模なスケルツォの間に、穏やかな田園風のトリオが置かれる。

第3楽章 アダージョ・モルト・エ・カンタービレ 天上の音楽を思わせる長大な緩徐楽章。瞑想^{めいそう}と平安の音楽はやがて金管楽器の強奏による突然の呼びかけで遮られる。

第4楽章 プレスト〜アレグロ・アッサイ^{ごうおん} 轟音とともに開始された後、先行する三つの楽章の主題が回想される。“歓喜の歌”の主題が姿を見せ、次第に高潮する。バリトン独唱に誘われて、合唱がシラーの詩「歓喜に寄す」を高らかに歌う。トルコ風の行進曲、トロンボーン（神の象徴として用いられる楽器）を伴った荘重な教会音楽風の合唱、二重フーガなど、多様な音楽のスタイルを混合させながら熱狂的なコーダへと突き進む。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル）、弦五部、独唱（ソプラノ、アルト、テノール、バス）、合唱
